

國學院大學學術情報リポジトリ

一九二六年中国におけるアメリカ留学派遣について：
『申報』記事を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-26 キーワード (Ja): 土井彦一郎, 中国近現代文学の翻訳, 支那時文, 善隣書院, アテネフランセ キーワード (En): 作成者: 牧野, 格子 メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000258

土井彦一郎訳註『西湖の夜』初探

牧野格子

一、はじめに

戦前日本において中国現代文学を翻訳した書籍は数種類あり、その中には、詳細な訳註を付けて、読者の中国語学習の助けとなったものもある。土井彦一郎訳註『西湖の夜——白話小説二十選^{〔1〕}』という翻訳作品集は、底本である北京近代科学図書館編『中國現代文讀本』収録の中国語原文作品を日本語にしたものである。訳註者の土井彦一郎は、現在では全く知られていないが、貿易会社のほか手広く商売をしていたようである。彼は幼少のころから、彼の父に貿易における外国語学習の重要性を教え込まれ、中国語だけでなく、英語、フランス語など合計五か国語に精通していたという。実業界に身を置きながら、博覧強記であった土井が翻訳集兼教科書を出版した目的とは如何なるもの

であったのか、本書の「叙」でこう述べている。

古来、漢籍の我が文化に貢献し來つた功績は到底測り知るべからざるものがある。従つて、今日在る日本文化の淵源由來を究めるのには支那古典の研究を忽せにしては粗漏の譏を免れ難い。然し、將來の日支文化の交流に想ひを致し、現代支那の姿を識らんと欲するには、時文の研究と俱に白話文の研究を没却するわけにはいかない。わたくしは豫てから、日本の中學生が漢文を讀み得る程度に現代支那語即ち時文と白話文を理解するの必要を痛感してをるのであるが、東亞の情勢が今や日支親善・日支提携の一路を邁進している秋にあつて、益々この感を深うせざるを得ない。わたくしがこの翻譯を思ひ立つたのも、一つには己の勉強のためであることは言ふま

でもないが、二つには、この翻譯によつて、時文にもまして難解とされてゐる白話文の研究の機運を促進し、惹いては興亞の大業に九牛の一毛を致さんとの微衷に他ならぬ⁽²⁾。

この箇所からは、戦前の日本人にとって文化の源である中国古典が如何に重要であつたかが分かる。そして口語体の白話文を学ぶことで、同時代の中国を知ろうとした土井の日中交流への尽力や中国の学問への憧憬が並々ならぬものであることが窺い知れる。つまり、『西湖の夜』は彼の日頃の努力の賜物なのである。

本書『西湖の夜』は一九二〇年代から三〇年代にかけての新文学白話小説を二十編収めている。謝冰心、魯迅、朱自清、鄭振鐸、周作人ら、中国新文学を代表する作家たちの作品が収められている。本稿では、翻訳者の土井、底本について述べた上で、内容や翻訳についての問題について述べたい。土井にとって本書、さらには中国語が如何なるものなのか探っていくのが目的である。

二、『西湖の夜』について

① 土井彦一郎について⁽³⁾

土井彦一郎は、明治十九年（一八八六年）大阪に生まれた。彼の父、土井彦十郎は、明治維新前より外国貿易業の先駆者として有名であつた。彼が十三歳の時（明治三十二年）、父が事業拡張の結果、失敗の憂き目に遭つた。その後、彦一郎は泰西学館英語専修科を卒業し、京都高島屋貿易部、大阪の正益館で貿易のノウハウを学んだ。彦一郎自身も将来は一人前の貿易商となることを夢見、そのためには外国語の精通することを目指した。退勤後の時間を利用して、清語学堂⁽⁵⁾で中国語を、国民英学会⁽⁶⁾で英語を学んだ。

ある時、中国語習得のためには、実際に中国へ行く必要性を痛感した。明治三十七年、十八歳の時、天津の瑞林祥元記綢緞莊に入社した。二百五十人いた従業員の中で、唯一の外国人であつた。数年の苦勞を経て、徴兵のため帰国を余儀なくされ、店を去る際、「蛟龍非池中物（立派な人物は池の中にこもらず時運を得て外へ出て大いに飛躍するだろう）」との賛辞を受けた。

その後、兵役除隊後、それまでの貯蓄を持ち東京に出て毛織物糸類及び洋紙の輸入代理店を開業した。老父母や弟

妹五人を抱えながら、その重責は並大抵のことではなかった。しかし、土井の語学への熱意は止むことなく、夜は二松學舎へ漢学（中国古典）を学びに行った。漢学を学んだ理由は「日本精神の眞髓を把握するには、漢學の本質を知るに如かず」という考えからであつた。その他にもドイツ語、ロシア語の学習も始めた。

さらに、營業上の必要から法律經濟を学ぶために中央大學に通い、大正六年三十一歳の時、首席卒業の銀時計を与えられた。

大正八年三十三歳の時、フランス語の学習を始め、神田のアテネフランセに入学し、十三年後の昭和七年に卒業した。アテネフランセ卒業後は、校友会の運営に携わり、長らく会計総務を担当し、昭和十九年には校友会会長を務めた。

土井を紹介している文章を書いた石山皆男⁹⁾は、土井の感心すべきところとして、三つのことを挙げてゐる。第一に四十八歳になつても夜学通いを続けていたこと、第二に従業員に対し行き届いていること、第三に外国人をよく世話することである。これは、土井自身が中国にいた時、現地の人々に非常に世話になつた経験から來ている。彼は、教育者または新聞記者である英、米、独、仏、伊からの在留

外国人に自宅を開放し、共同生活をしてゐた。彼は身を以て、また私財を投じて、國際交流を実践してゐたのである。この功績に対し、昭和十年、当時の駐日フランス大使であつたフェルナン・ピラからパルム・ド・フィシエ・ダカデミー勲章（フランス教育功労章）が授与された¹⁰⁾。

中国語學習の面では、アテネフランセ通學と並行して、善隣書院にも通つてゐた。善隣書院研究科の人見金次郎という人物は以下の通り書いてゐる。

今から三年ばかり前の或る冬の夜であつた。麹町の善隣書院の研究科に人品卑しからざる相當年輩の仁が、私達と同じやうに學生席に坐つて、（略）熱心に聽講して居られた。爾來、その人は雨の夜も風の夜も缺かさず出席してをられた。元來、この善隣書院と言ふのは、學校と言ふよりも寧ろ一の塾である。（略）その熱心な同學の友は、いつも後に残つて、黒板の文字を綺麗に拭き、教室の電燈をすっかり消し、一切後仕舞をしてから歸れるのであつた。その克明な行動から僕はこの人に特に注意を惹かれるやうになつた。勿論これは學校から頼まれたことではないが、始終黙々として實行し、一晚も怠つたことはない。僕はそれから次第に強くこの人物の心

を惹かれて来て、遂に好奇心と敬意は友情に進み、一日その人と相識り相語るの機會を持つに至つた。それが土井氏であり、後年の本書の著者であつたのである。(略)

一層その感を深くすることは、土井氏が正しく、強く、不斷の努力によつて自己といふものを修養し、充實して來られたことである。(略) 土井氏は(略) 過去四拾餘年間繁雜なる業務の餘暇に毎日早朝と夜間の數時間或は専門の講師を招聘せられ、或は一學生として登校せられ、孜孜として修養を續けられたさうである。(略) 土井氏の學力は、僕等より遙か數段の先輩である。否、氏の造詣蘊蓄は夙に専門の學徒の域に達してゐて、我々學生などと比較するのが既に無駄である。これだけの博學な知識を持ち乍ら、尚且つ熱心に精進してをられる同氏の努力には唯唯感嘆のほかはない。

以上の通り、土井彦一郎は、家業の側ら、語学の勉學を継続した。その結果、五ヶ国語に通じ、特に、フランス語と中国語を得意としていた。彼の人一倍の努力は、周囲の若い同学を圧倒していた。また、講義の後には必ず後片付けを自主的に行い、人格の上でも尊敬を集めていた。

次に『西湖の夜』が出版された経緯について見てみよう。

②『中國現代文讀本』

さて、この節では、先に底本となつた『中國現代文讀本』を詳細に見ていくことにする。

この書籍の編者は北京近代科学図書館とあり、山室三良、錢稻孫が名を連ねている。北京近代科学図書館⁽¹⁾は、一九二〇年代に始まつた東方文化事業の一つとして設立された。

東方文化事業とは、一九二〇年代中国で広まつた排日風潮を緩和するため、義和団賠償金を基に始まつた文化事業で、当初は外務省の管轄、一九二五年からは日中共同で運営し、二八年からは中国側が抜け、日本の単独運営となつた。

山室三良は、図書館設立当時、外務省留學生で、図書館長代理を委嘱された。彼の意見により、日本語の書物を集め、十万冊の蔵書を擁した。また日本文化を広く紹介する『館刊』を発行し、「日本語講習会」を開いた。しかし、日中戦争の激化により、予算が削られ、それに抗議した山室は現地召集された。敗戦後、蔵書は散逸してしまい、中国最大規模の日本語蔵書を有する図書館は終焉を迎えた。山室はその後、中国哲学研究を続け、九州大学教授となつた。

錢稻孫⁽²⁾は、日本人の父を持ち、中国人の母を持つ、日本

文学の翻訳者で、『万葉集』を始めとする日本文学の中国語訳で有名である。また上述の北京近代科学図書館が発行していた『館刊』に多くの日本文学の作品の中国語訳を掲載した。図書館内の実務の面では、多くの日本語蔵書の整理を行っていた。

『中國現代文讀本』には二種類の版本がある。最初のものは、一九三八年に北京近代科学図書館から出されたものである。二番目のものは、一九三九年、白水社より出版されている。この白水社版に関しては、『西湖の夜』と同時期に出版されており、二冊とも合わせて読者に供するためではないかと推察される。この二種の版本の内容は全く同じである。違いは表紙と最後のページぐらいである。

『中國現代文讀本』の「序」で、銭は以下の通り書いている。

時文といふと科挙時代に於ける八股文に聞えて、この四五十年來の現代文乃至白話文にはどうしても相應はしくない名稱ではある。又三面記事や商用書簡を標準とする所謂時文では、兩國青年が心から語り合ふに資すべく餘りに不充分である。

山室館長茲に見る所あつて、この『中國現代文讀本』の編纂を意圖せられた。これ二三同人——尤炳圻、洪炎

秋其他諸氏——と共に自ら罪才その任にあらざるを覺知しつつ、も、その役に參與することを敢へて辭しなかつた所以である。

されど白話文もその實未だ〳〵洗練せる段階にまでは進んでゐない上に、これまであまりにも關心を持つてゐなかつた同人の目には、實にその僅かな部分しか入らなかつたことを、この二十ばかりの短篇を選り出すことによつて、今更ながら痛切に感じた。そして僅かな而も親切の足りない註も、見當のつかなかつたため、凡べて今後修正の機會に譲り、今は指導に當られる先生方に宜しくお願ひすることにせねばならぬのを遺憾とする。謹んで同人を代表して一言深謝の意を表したい。

錢稻孫は、最新の中国語、そして中国文学を紹介しようという志のもと、この本を出版した。それに応えることになるのだろうか、日本の勤勉な中国語学習者である土井『中國現代文讀本』の訳註本を出した。錢稻孫にとつて土井は、自らの出版物をもつとも尊重する最も誠実な読者と言えよう。次節では、その誠実な読者による訳註本である『西湖の夜』について、詳しく見ていくことにする。

②『西湖の夜』について

『西湖の夜』の出版の経緯についてであるが、奥付にはこう書かれている。

訳註者 土井彦一郎

発行者 福岡清

印刷者 小酒井吉蔵

印刷所 研究社印刷所

製本者 中野和一

発行所 白水社

昭和十四年十二月五日印刷

昭和十四年十二月十五日發行

非賣

発行者の福岡清^{せい}は、白水社の当時の社長であつた。清は、白水社の創業者である福岡易之助の妻で、昭和六（一九三二）年に易之助が結核療養中不慮の事故で亡くなつた後を受けて、二代目社長となつた。

印刷者の小酒井吉蔵は、出版社である研究社の創業者の小酒井五一郎の親族である。

製本者の中野和一に関しては不明であるが、戦前期の白

水社の製本を担当していた中野製本所の責任者であつたようである。

そして、注目すべきなのは「非賣」の二文字で、この本が、販売するための書籍ではなく、自費出版であつたことが分かる。出版された年、昭和十四年に発行されたアテネフランセ校友会誌「あてね」第十号⁽¹³⁾には出版のお知らせが掲載されている。

西湖の夜 土井彦一郎訳註

本書は北京近代科學圖書館發行「中國現代文讀本」の邦譯である。原著は、中華民國現文壇の大家魯迅、周作人、林語堂及代表的女流作家の謝冰心、朱自清等が支那現代のラングバルレである白話文で書いた短編隨筆等の二十篇を集めたものである。「西湖の夜」は輯録の一篇をとつて署名とし、原文の忠實なる翻譯に添へるに、詳細なる頭註を以てしたる好著であつて、今や國を擧げて日支提携が提唱せらるゝ時局下に於ける著者の捨石として文化的にも、政治的にも極めて意義深い業迹である。（白水社出版、非賣品、本校圖書室へ數部寄贈を受けたるにつき御希望の方へ御貸し致します）

校友の情報交換の場である「たより——アテネをめぐつて」では、以下の通りの宣伝が書かれている。

われら校友会々長土井彦一郎氏は公私御多用の中をこの度別項記載のやうな日支兩國民相互理解の貴重な資料たるべき御著述を公にされました。執筆に熱中の余り夏の短夜の明けわたるのに氣づかれなかつたことも一再ならずおありになつたとか。博い愛と熱との籠められたこの書をひろくお薦めする次第であります。

フランス語の愛好者が集まるアテネフランセの校友会誌に中国小説の翻訳集の宣伝が掲載されたということは、少々奇妙ではある。しかし、土井と近しい校友には土井の人柄や日頃の努力が知られているのならば、理解を以て受け入れられたのかもしれない。

次に、『西湖の夜』収録作品について確認してみよう。収録作品は以下の通りである（カッコ内は中国語原題、『中國現代文讀本』に拠る）。

収録作品を見ていくと、魯迅、謝冰心、郁達夫、周作人、林語堂、沈從文、老舍など一九二〇年代から活躍した作家

表 1

	作者名	翻訳題名	原題と備考
一	謝冰心	優しい兵隊さん	一個慈藹的兵丁（正しい題名は「一個兵丁」） ⁽¹⁴⁾
二	朱自清	後姿	背影
三	吳曙天	母へのたより	寄給母親的信 ⁽¹⁵⁾
四	劉半農	半農先生の写真一家言	半農談影
五	陳衡哲	老いたる柏と野薔薇の対話	老柏与野薔薇 ⁽¹⁶⁾
六	鄭振鐸	猫	貓 ⁽¹⁷⁾
七	梁啓超	学問の趣味	学問之趣味 ⁽¹⁸⁾
八	周作人	勝業	勝業 ⁽¹⁹⁾
九	郁達夫	孤独の途上	一個人在途上
十	趙景深	文学者の一週間	書生の一週間
十一	章衣萍	不平を鳴らす	呼冤 ⁽²⁰⁾
十二	傅東華	小品と蠅	小品和蒼蠅
十三	魯迅	秋夜	秋夜 ⁽²¹⁾
十四	林語堂	ユーモアの説	幽默解（正しい題名は「論幽默」） ⁽²²⁾
十五	周作人	喫茶	喫茶 ⁽²³⁾
十六	朱光潜	趣味を語る	談趣味 ⁽²⁴⁾
十七	沈從文	牛	牛
十八	舒慶春	頭を擡げて喜を見る	抬頭見喜 ⁽²⁵⁾
十九	魯迅	無常	無常
二十	俞平伯	六月十八日の西湖の夜	西湖的六月十八夜 ⁽²⁶⁾

の作品を取り上げているだけでなく、鄭振鐸、朱光潜、俞平伯といった文学理論家の作品も収録している。さらに、呉曙天、傅伝華、章衣萍といった今ではあまり知られていない作家の作品も取り上げている。

現在では中国近現代文学史のなかで、今でも主流とされている作家だけでなく、今では有名でない作家を取り上げているのを見ると、あくまでも出版当時、それなりに名の知られた作家、文学者のものから収録したのだとも考えられる。当時反響のあった作品から、銭稻孫自身の好みも踏まえつつ、収録作品を選んでいたのかと思われる。

三、訳註の特徴と問題

では、実際に訳註について見ていく。全体的に見てみると、『西湖の夜』は翻訳集と読本としての役割を果たそうとしている内容だが、それぞれ優れた点と問題点を抱えている。以下の四つの点から翻訳の問題を分析する。

① 語註のつけ方

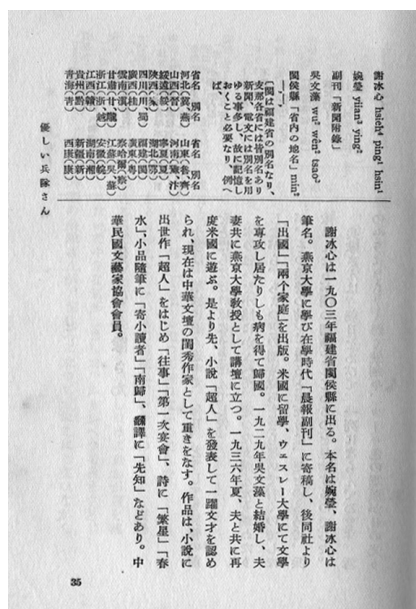
元本である『中國現代文讀本』が一作品に二十ほどの語註を付けていたのに対し、『西湖の夜』は一作品に百を超

える語註を付けている。画像①と画像②の通り、『西湖の夜』では毎ページの上部に語註が示されている。語註のつけ方について言えば、作品理解に直接関係のないもの、半ば必要のないものまでに及んでいる。

例えば、画像①は謝冰心の「優しい兵隊さん」の冒頭で、作者紹介の箇所があるが、上部の左側にはすべての省の別称を掲載している。これは全く必要のないものである。

他に、発音記号をつけただけのもの、果ては最後に語釈が収まりきらない為、上部二段を使って語註を付けているページもある。以上のことから、訳註者の土井にとつてこ

図 1

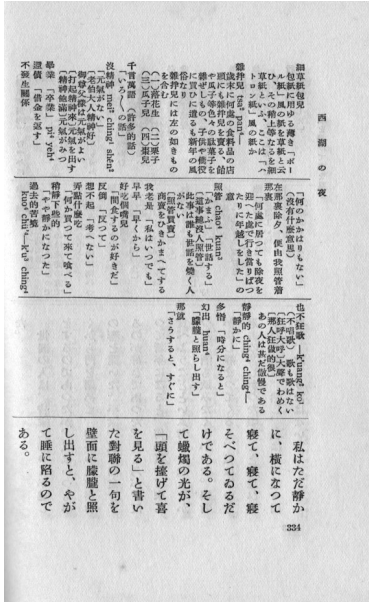


これらの語釈は、自分の学習の内容と過程を示したいためのものであり、読者の理解にとって必要なものを考慮したものでないように思われる。

さらに図②のように、作品の最後の方には語註が多すぎて、上三段まで使って示している。その中でもやはり直接物語に関わりのないものもある。だが、これほど多くの語註を付した努力は捨てがたいものがある。一方的に無価値と断ずることもできない。

②「女流作家」作品の翻訳

「女流作家」との称号が付せられた作家の作品は、非常



に優しく柔らかな文体で翻訳されている。例えば、謝冰心の「優しい兵隊さん」は、中年の兵士と近所の子供との悲しい交流を描いた作品である。謝冰心の小説は児童文学とされることが多いが、土井も謝冰心作品の傾向と内容を鑑みて、極めて分かりやすい文体で訳したのだろう。

兵營もからつぽになつてゐました。その時、兩手で銃を杖にして、兵營の前で、眼に涙をためて、立つたままじつと見つめてゐたのは、あのまつくろな優しい兵隊さんではなくて、無邪氣な可愛い小玲でした。

陳衡哲の「老いたる柏と野薔薇の對話」は、植物を擬人化し、老人と若さや美を誇る女性に仮託して描いた対話形式の小説で、一種の寓話的な要素もある。ただ、間に挿入される主人の言葉や、最後の柏の詩的なセリフは、原文の雰囲気を保ったまま訳せている。

主人（歌ひながら）

百年の老樹の、茂りさかえたその枝も、たをやかなる草花に、及びもつかぬ。命の意味を草花は、完うするのに、老樹には、ああ口惜しや一生を、完く仕遂げる時もない。

老いたる柏（嘆きながら歌ふ）

たとへ三日の光榮でも、いのちの意味を、いまこそは、
終に完くなしとげた。圓滿、徹底、そしてまた、いと高
きあの陶醉……ああ、どうすればこの私、幸運にめぐり
あひ、いつの日か到りつかん、あの「ユートピア」。

呉曙天の「母へのたより」は自らの母に宛てた手紙の形
式で、夫の理不尽な態度と暴力的な性格に耐え忍ぶ若妻の
姿が浮かび上がる。

どうかするとすぐにそこらにある物を投げつけたり、
ぶちこはしたりして、まるでお構ひなしなんですもの。

お母さん。

これはきつと、あたしが夫を愛しすぎたせみだわ。だ
から夫はこんなに変になつたのよ。お母さんも夫を責め
ないでね。あたし夫の病気を治すためなら自分はいつま
で苦勞してもいいと願つてゐるのよ。そして、あたしの
心の苦痛と夫の笑ひ顔とを、取換へたいとさへ望んでゐ
るのよ。あたしそれで満足だし、何の不足もないんです
もの。

以上のように、柔和な言葉づかいによつて、夫を受け入
れる包容力と忍耐力が際立つて表現できているといえるだ
ろう。

しかし、一つの大きな誤りとして、朱自清が「女流作家」
となつてゐることが挙げられる。そのため、「後姿」も老
いた父とのひと時の後、北京へ戻つていく若い女性の独白
の形で訳されてしまつてゐる。こうした誤解が生じた原因
については後で詳述するが、ただ、柔らかな女性の言葉に
することで、原文の簡潔な文体がやや損なわれているよう
に思われる。

③論文調の翻訳文体

本書には論文としてもとらえられる散文作品も収録され
てゐる。一つが林語堂「ユーモアの説」、梁啓超「学問の趣味」
と朱光潜「趣味を語る」である。

林語堂「ユーモアの説」に関しては、他作品と色合いが
些か違つてゐる。日本語訳の文体は全体的に基本的に口語
であるが、ところどころ漢文調の言い回しが入り混じつて
ゐる。これは、林語堂自身が白話運動の中で独自の文体を
目指してゐたということも関係あるだろう。彼が提唱した
「語録体」²⁷⁾がこの文章の中で結実しているからではないか。

土井の翻訳の中で漢文調が表れている箇所を挙げ、原文と対照してみよう。

その上、道家の思想の源泉は、深遠廣大であつて老莊の文章もまた氣魄に富んでゐるから、その効力は時代を経ても磨滅する能はざるものがある。(而且道家思想之源泉浩大、老莊文章氣魄、足使其效力歷世不能磨滅)

梁啓超の「學問の趣味」も同様の文体で訳されている。

目的を達成するといふ見地からは、自ら努めて手段を用ゐるのであるが、一たびそのその目的が達せられてしまふと、手段は直に拋棄せられるのである。

例へば、學生が卒業證書の爲に學問を爲すが如く、著作家が版權を得んが爲に學問を爲すがごときものである。

朱光潜の「趣味を語る」は上記の二編に比して、やや柔らかい文体になっており、散文に近い翻訳がなされている。

羅典の古語にかういふ句がある。「趣味の話に争ひ無

し。」「文は千古より在れど、その善惡は我が寸心にて知る。」と。これは作者が己の作品に對する場合も亦これより他には批判の方法はないのではなからうか。(略)

文章にはおのづから是非の標準がある。が然し、その標準といふのは古典ではない。また「久しきに耐へること」でもなく、「廣く普及すること」でもない。即ち、最も偏れるところから最も偏らざるところへ進み大所高所より俯瞰して一切の流派類型を超越したる趣味こそ、是非の基準となるべきものである。

以上の通り、作者の思考、主張などを載せて筆を運んだ文章については、土井はその意図を読み取り、ある程度適切な文体で訳していると考えられる。

④ 理解しやすい情景描写

本書で最も顕著な特徴として、逐語訳ではなく、言葉を添加し、読者に分かりやすい訳出をしている点が挙げられる。例えば、朱自清の「後姿」の中で、主人公の父がプラットフォームと線路をまたいで、ミカンを買に行く場面がある。日本語に訳すのは中々難しい個所である。

窓から見ると、向ふのプラットフォームの木柵の外側に五六人の物賣りが客を待つてゐるのが目についた。向ふのフォームに行くには、どうしても線路を越えなければならぬし、それには、こちらのフォームを飛び下りてそれから又向ふのフォームに攀登しなければならぬ。

父はでぶさんだつた。向ふへゆくのは勿論なかなかのことであつた。それで、父がさう言ひ出した時、私が自分で行つてくると言つたが、父は私の言葉に耳をかさうとしないので、仕方なしに父の言ふなりにまかせた。

こちらから様子を見てゐると、黒い布の小さい帽子をちよこんと頭にのせて、黒木綿の羽織に濃青色の綿入れを着た父は、足元もあぶなげに、ひよろひよろと線路のところまで行くと、おもむろに下を見ながらフォームから下りた。これは大してむづかしいことではなかつた。

だが線路を横切つて、さて向ふのフォームに攀登すると、これは生易しいことではなかつた。父は兩手で體をぐつと持ちあげたかと思ふと、兩脚を思ひきり縮めた。それから、でぶでぶの胴體を少し左の方へ振り加減に傾けてゐる様子には、力一杯頑張つてゐることがありありと見えた。

前述の通り、土井は朱自清のことを女性と誤解し、女言葉で訳してしまつてゐる。「後姿」は本来簡潔な文体でやや無骨で難解な印象を受けるが、土井の誤解とは言へ、柔らかな女言葉が、結果情景描写を分かりやすく訳していることになったのは興味深い。

四、おわりに

『西湖の夜』巻頭に松江県自治委員会・北外弁事処主任であつた廖旭光から贈られた「日支提携」の書が載せられている。廖旭光に関しては不明であるが、松江県自治委員会とは、汪兆銘政権における上海地方の自治機構である。ここからは日本の傀儡政権であつた汪兆銘政権とある程度の関係があつたと考えられる。

ここで疑念に思ふのは、土井自身が中国人と深く付き合ひ、異文化の中で格闘したといった詳細や内面について述べた箇所はあまり現れてこないことである。これは資料が不足しているためもあるう。ただ、土井が中国や中国語を学ぶことに関して述べた箇所として、前掲の人見金次郎による文章の中で引用されている土井自身の卒業の辞である。

この辞の中では、有名な実業家である洪澤榮一が中国へ視察に行ったが、北京語が全く分からなかったというエピソードを紹介している。洪澤は、日本人は『論語』など中国古典に親しんではいるが、この素養がこれからの日中親善の「有益なキー」になるとも言ったという。つまりは国情や言語が違っていても、人情や思想は同じだという主張であった。

以上のエピソードから土井は、今後、日中の間で何か起こっても、面と向かって語り合うことができるが、相互理解は、その間に立つ翻訳者にかかっているとの考えに至った。そして、以下の言葉で締めくくっている。

諸君 善鄰書院在日本是第一研究支那語的専門機關不但教育語言人情和風俗而且養成於國家發展上不少有用的人才是我們書院的目的

（諸君 善隣書院は 日本で第一の支那語を研究する専門機関である 教育 言語 人情や風俗だけでなく 国家の発展の上で 多くの有用な人材を養成するのは 我々書院の目的です。）

土井の中国語に対する考えとは、「国家の発展の上で多

く有用な人材を養成する」ための言語であり、結局はビジネスのための道具に過ぎなかったのではないか。それは、中国古典という共通の素養の土台を持つと言い、少壮の頃から実際に中国へ行き中国人と寝食を共にした経験を持ちながらも、人間同士の付き合いや葛藤が見えないからである。少なくとも、中国やフランスのお歴々との交流や自らの名譽を前面に打ちだした巻頭・巻末の部分からは、実際の心の葛藤などは表れていないように思われる。

土井彦一郎は戦後、神奈川県公安委員会委員長や全国都道府県公安委員会協議連絡会会長を歴任したという。彼は昭和三十年代半ばまで務めあげたようである。この頃に土井自身『新しい自助伝』という自叙伝を自費出版したようだが、今のところそれを発見できず未見である。そこには「もし土井彦一郎氏が学者であつたら」という錢稻孫による一文が掲載されている。この文章からは錢から見た土井像が分かるだろう。

土井彦一郎は、在野の人であり、彼が熱心に学んだ中国語・フランス語もビジネスの道具の域を出なかったようである。当時「支那時文²⁹」と呼ばれた中国語は、中国大陸進出のための言語の要素が最も強かった。土井も当時の認識から脱することはなかったのではないか。

ただ、翻訳に関しては、それぞれの作品における作家の意図をくみ取り、文体に工夫を施している。そして直訳に拘らず、分かりやすさに努めて一つの世界を作り上げている。その点は評価すべきところではないだろうか。

歴史の中にうずもれ、今では知られなくなった人物ではあるが、より調査が進めば、新たな事実が分かるかもしれない。土井彦一郎と言う人物には、まだ調査の余地があると思われる。

〔注記〕その後、『土井彦一郎伝 前篇』（田中早苗著）を発見した。現在入手困難であるが、この本からは新たな事実が得られるだろう。本論文は土井の伝記を参考にしない時点の研究とし、今後入手できた場合、稿を改めたい。

注

- (1) 土井彦一郎訳註『西湖の夜——白話小説二十選』（白水社、昭和十四年（一九三九年））
- (2) 土井彦一郎『西湖の夜』「敘」一頁～二頁
- (3) この個所は、「貿易商 土井彦一郎氏 没落した父の事業を努力を以て再興し、側ら夜學で五ヶ國語を習得しついに大學の銀時計を獲得」（石山皆男『我等の誇り』ダイヤモンド社、昭和九

（一九三四）年所収、『西湖の夜』収録、陸軍主計少將 日足信亮「土井彦一郎先生」文中に再録を参考にした。

(4) 大阪にあった英語学校。現在の大阪商業大学の前身。

(5) 神田錦町にあった中国語学校。日清戦争後、陸軍軍人への中国語教育のために設立された。速成科と学科がある。速成科は中国に関わる事務その他の業務を行うための通訳養成を目的とし臨時に設置された。学科は、「支那語学（日常会話）」と「支那時文（清代から民国期の民間で使われた中国語の文体）」を教えた。（富田蟻陵『男女就職案内…簡易手続』、青松堂、明治四三（一九一〇）年、国立国会図書館デジタルコレクションより）

(6) 同じく神田錦町にあった英語学校。慶応義塾教員であったイーストレイクと磯部弥一郎が設立した。訳読科、正科、文学科、夜学科の四科を設置していた。就業期限は訳読科が三年、正科、文学科が一年、夜学科が一年半であった。（広原新編『改正官立公立及び私立諸学校規則集』個人出版、明治二八（一八九五）年を参考にした。）

(7) 山東省を発祥とする衣類百貨店。北京の前門で開店し大変繁盛した。現在はのれん分けをした瑞蚨祥が前門に残っている。

(8) 本来は「恐蛟龍得雲雨 終非池中物也。」（『三国志』卷五十四「呉書 周瑜伝」）である。

(9) 石山皆男は、ダイヤモンド社に大正十年入社し、昭和九年

に出版部創設した際、部長を務め、その後取締役となった人物である。(ダイヤモンド社、石山賢吉メモリアルライブラリ <http://www.dia-ishiyama-hall.jp/memorial/friends/index.htm#ishiyama2>を参照した。)

- (10) フェルナン・ピラ (Fernand Pila) は、フランス第三共和政期の駐日フランス大使 (在任時期一九三五―三六年) である。

フランス教育功労章 (L'ORDRE DES PALMES ACADÉMIQUES) とは、一八〇八年ナポレオンによって創設され、高等教育を含む教育全般に携わる人物に贈られる勲章である。その中には、シュヴァリエ (Chevalier、騎士)、オフィシエ Officer、将校、士官、コマンドゥール (Commandeur、領主である騎士) の三段階の等級がある。文中の「ドフィシエ」とは上記の「オフィシエ」と考えられる。(在日フランス大使館HP フランス教育功労章 <http://www.ambfrance-jp.org/article483>を参照した。)

- (11) 北京近代科学図書館や東方文化事業については、岡村敬二「北京近代科学図書館の〈日本〉」(『日本研究』第七号、国際日本文化研究センター、一九九二年) を参照した。

- (12) この箇所は鄒双双『文化漢奸』と呼ばれた男 万葉集を訳した錢稻孫の生涯 (東方書店、二〇一四年) を参考にした。

- (13) 正式名は「日佛アテネ校友會會報 あてね」第十号 (昭和十四 (一九三九) 年) 二十四頁―二十五頁より。「あてね」に関

して、アテネフランセ秘書室の川口史子さんより資料をご提供いただいた。ここに記して感謝申し上げます。

- (14) 初出は『晨报』一九二〇年六月十日。

- (15) 吳曙天は同じく作品が収録されている章衣萍の妻。章との恋愛期間につけた日記『恋愛日記三種』が有名である。

- (16) 陳衡哲 (一八九七―一九七六年) の最初にして唯一の小説集『两点』所収。これらの作品群は中国初の白話小説である。

- (17) 一九二五年十一月七日に書かれた。後、作品集『貓』に収録された。

- (18) 初出は『司法儲才館季刊』第二期、一九二七年一月。「学問之趣味」として発表された。内容自体は一九二二年八月、南京の東南大学での講演をまとめたものである。

- (19) 一九二一年に書かれ、後に『談虎集』(一九二八年)、『知堂文集』(一九三三年) に収録された。

- (20) 章衣萍 (一九〇二―一九四七年) は、小説家及び翻訳者である。北京大学卒業後の一九二四年、魯迅と共に雑誌『語絲』を創刊した。代表作に『情書一束』、『情書二束』、『古廟集』などがある。

- (21) 傅東華 (一八九三―一九七一年) は、翻訳者兼編集者。初出は不明。夏丐尊等著『幽默的叫賣聲』(太白速寫選、一九三五年、生活書店) には、「小品文跟着蠅」として収録されている。

- (22) 初出は『論語』第三十三期 (一九三四年一月十六日) と

三十五期（一九三四年二月十六日）の二回に分けて発表された。内容は「上編」「中編」「下編」に分かれ、本書収録のものは「上編」である。

- (23) 初出は『語絲』第七期、一九二四年十二月で、後に『雨天的書』（一九二五年）に収録された。この際の題名は「喝茶」である。さらにその後、『沢瀉集』（一九二七年）、『知堂文集』（一九三三年）には、「喫茶」の題で収められた。「喝茶」と「喫茶」の間には若干の字句の異同がある。（伊藤徳也『生活の芸術』と周作人——中国のデカダンスとモダニティ）勉誠出版、二〇一二年より。）

- (24) 初出は『益世報』文学副刊第一期、一九三五年三月。後『孟実文鈔』に収録された。

- (25) 初出は『良友』（画報）第四卷第八期、一九三四年一月。なお舒慶春とは老舎の本名。

- (26) 兪平伯『燕知草』（一九二八年、開明書店）所収。

- (27) この箇所については、朴桂聖「林語堂の文体論——「小品文」から「語録体」へ——」（『一橋論叢』第二二八卷第三号、二〇〇二年九月、三四八頁～三六五頁）を参考にした。

- (28) 自然療養社から発行され、非売品であったようである。発行年月日は不明。

- (29) 支那時文教育に関しては、邵艶「戦前日本の高等商業学

校における中国語教育…山口高等商業学校を中心に」(『研究論叢』二〇〇五年十二月 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81008639.pdf>) などを参考にした。ただ戦前、特に一九〇五年の日露戦争あたり、大陸進出が盛んに言われ始めた頃から、多くの支那時文の教科書が発行されている。さらなる研究が必要である。

「キーワード」 土井彦一郎、中国近現代文学の翻訳、支那時文、善隣書院、アテネフランセ